

アスペルガー障害男児に対する犬関連刺激の回避行動への介入の効果 犬との遭遇に関わらず親の同伴なしで徒歩下校する行動の形成

Effect of the intervention to avoidance of dog-related stimuli for a boy with Asperger's disorder

○笹田 夕美子 ・ 奥田 健次

(浜松市発達医療総合福祉センター) (行動コーチングアカデミー)

Yumiko SASADA, Kenji OKUDA

(Hamamatsu-City Welfare and Medical center for Development) (Academy of Behavioral Coaching)

Key words: dog-related stimuli, token economy, exposure,

【問題と目的】 本研究は、実物の犬をはじめ、犬という言葉や犬の絵、写真、たぬきや猫等の小動物などの刺激（以下、犬関連刺激とする）を回避するために保護者同伴でなく登下校できないアスペルガー障害男児を対象にトークン・エコノミー法とエクスポージャーを用いた介入の効果を検討することを目的とした。

【方法】対象：アスペルガー障害と診断された小学4年生男児。通常学級在籍、WISCIII (CA8:8)FIQ94 (VIQ110,PIQ78)。幼児期から犬を怖がりはじめ、しだいに犬に関するものを避け徒歩での外出を嫌がるなど問題が拡大してきていた。登下校時も犬関連刺激に過剰に反応して車道に出る、他児を押す・叩く等の行動があったため、毎日保護者の送迎が必要になり、母親はかなり疲弊していた。

標的行動：犬関連刺激の有無にかかわらず保護者の同伴なく単独で下校すること。**ベースライン：**下校時の手段（徒歩か自転車）と親同伴の有無、経路（通学路かそれ以外の道）、下校時の犬との遭遇の有無、下校時の逸脱行動（車道に出る、友達をたたく、悪口・暴言、犬の話で騒ぐ）の有無を記録した。**介入：**介入1では、下校時の手段（徒歩か自転車）、親同伴の有無、経路、犬との遭遇報告の有無、逸脱行動の有無を得点化してトークン・エコノミー法を実施した（フェイズ1）。なお、対象児は貯金へのこだわりがあったため、バックアップ好子として週ごとのポイントを1ポイント1円で換金した。介入2では、トークン・エコノミー法に加え、犬関連刺激（Table）に対するエクスポージャーを7セッション実施した（フェイズ2）。その後、介入1と同条件のトークン・エコノミー法のみを継続した（フェイズ3）。

果、犬の話、犬の絵本、絵、写真、動画、ぬいぐるみ、実物の犬に接近すること、犬と歩道内ですれちがうこと、通学路にある“犬ゾーン”（犬の散歩が多いエリア）を歩くことが達成できた。対象児自身が「犬に出会ってもフリーズ攻撃でじっとしていればだいじょうぶ」と言い、実際にセッション中に3匹の犬が吠え合う状況に遭遇してもじっとして騒がず通り過ぎるのを待つことができた。介入2の後、トークン・エコノミー法のみを継続したフェイズ3では単独下校率が上昇し、保護者の同伴なしで徒歩下校するという行動は、学年がかわっても維持された。学校の校外学習で盲導犬がいたときや生活場面で犬に遭遇したときにも騒がずに通ることができたと保護者や担任から報告があった。一方、エクスポージャー実施後も、通学路を通して帰ってきたのは1回のみであった。通学路には“犬ゾーン”があるだけでなく、距離が3倍以上になることも通学路を通らなかった要因と考えられた。

下校時の逸脱行動は、28~29週の学年末および学年はじめにかけて多く出現した。具体的には友達のからかいや学校でのトラブルをひきずって悪口を言うといった行動であり、犬に関連するエピソードとは異なっていた。さらに、同じ道を通っているにもかかわらず、犬との遭遇報告そのものも減少しており、犬関連刺激への過剰な反応も消失してきていることがうかがえた（Fig.2）。

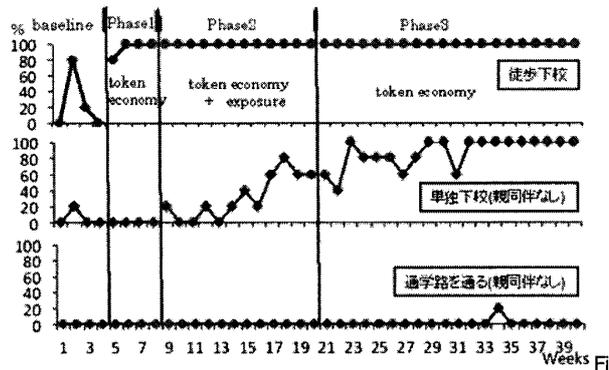
アスペルガー障害をもつ本児に対して、特定の対象物とそれに関連した刺激への回避行動を消去し、適切な対応行動を形成できる可能性が示された。

Table エクスポージャーに用いた犬関連刺激およびポイント数

場所	セッション						
	1	2	3	4	5	6	7
セッションで提示したポイント数	20	50	70	70	70	200	200
病院内	犬について話す	○					
	犬の絵本の朗読をきく	○					
	犬の絵本を声をだして読む	○					
	犬の絵と写真に3秒間さわる	○	○	○	○		
	犬の写真と絵を切り抜く		○	○			
	犬のぬいぐるみにさわる		○	○			
	犬の絵・写真・ぬいぐるみのある通路を歩く			○			
	音声なしの犬の動画の画面にさわる				○		
	音声つきの犬の動画の画面にさわる					○	
	犬の大きな絵と写真にさわる						○
病院内周辺	寝所の上から実物の犬をみる(約10m)					○	○
	実物の犬に接近する(約3m)						○
	実物の犬に接近する(約2m)						○
地域	犬を運んだ人と歩道ですれ違う(50cm)						○
地域	通学路にある“犬ゾーン”を歩く						○

【結果と考察】 介入1でトークン・エコノミー法を導入した結果、母親の自転車の後ろに乗らずに徒歩で下校することが100%となったが、単独で下校することはなかった。介入2で犬関連刺激へのエクスポージャーを導入後、親同伴なしでの単独下校率が増加した（Fig.1）。

介入2の犬関連刺激へのエクスポージャーを行った結



g.1 週ごとの徒歩下校率、単独下校率、通学路選択率の推移

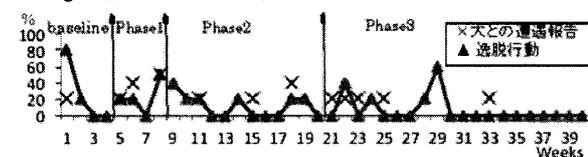


Fig.2 週ごとの下校時の犬との遭遇報告率と逸脱行動発生率の推移
《謝辞》 本発表に際し主治医の遠藤雄策先生に深謝申し上げます。